

Title	尾道市史(尾道市役所編並に發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.183- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はずのでなければ年表の目的を充分には果し得ないかに考へられたるを以て、初めの計畫に西洋文化史を對照せしめ、更に哲學を廣義に解して特別の系統をもつ東洋特に日本思想史をも共に採擇したい欲望に驅られた。これに於て主點はどこまでも哲學年表に置きつつ、文化各般の事項に對して廣い見通しを必要とすることとなつた。

と。要するに本書は「思想と時代」について、全般的にこれを一覽するの便に供したものである。從來思想史に多少とも關心を有する人々にとつては、最も望まらるべくしてしかも今日まで遂に果されなかつたものであつたが、幸ひ本書が出でてその要望にこたへたのみならず、極めて深い用意と精密な考慮のもとに編せられたものとして、本書の刊行は、大いに慶祝されてしかるべきである。

記述の體裁は大體左右兩頁を哲學關係と文化史關係とにわかつて、哲學關係を記す左頁には西曆、哲學者傳、哲學書を含み、文化史關係を記す右頁には西洋文化史、東洋、日本兩文化史（但し佛教渡來以前は東洋文化史、その以後は日本文化史に主點をおく）、皇紀を掲げ、その上附表として添へられた學派系統別哲學者在世年表、徳川時代思想家藝術家一覽表及び一般と哲學者との二つの詳細な索引が本書を更に價値づけてゐる。

編者はまた「もし現代の世界史的大變動のさ中にあつてこの閑事業が何等かの存在理由を有し得るならば、編者の望み之に過ぐるものはない」とも云つてゐるが、かゝる仕事が決して閑事業として出来るものではあるまい。進捗は遅々としながら、しかも必

ずや不斷の努力がはらはれなければならぬものである。何よりもまづ簡潔を旨として、一言の説明的言辭をほどこす餘白も許されない年表には、一事一物の採擇にも人知れぬ苦心が偲ばれる。「そして萬一大方の支援と批判とを得ることができたならば、この終りなき仕事は一層よく人類の文化史的遺産を記録し得又記録し行くであらう」といふ編者の言を、筆者も共に信じ且つ望みたいところである。（四六判三一頁、他附表索引）（倉田倉吉）

尾道市史

（尾道市役所
編並に發行）

備後尾道市は開港凡そ一千年の歴史を有する内海屈指の商港である。我が國は四面環海なる爲め、史上に名を残す商港は枚擧に遑あらざる程であるが、凡そ一千年の古い歴史を有するものは稀有と云ふべきである。尾道市の商港として歴史上に誕生せしは、高倉天皇の嘉應元年、備後國世羅郡太田庄なる莊園の船津倉敷地として指定開發せられし以來である。太田庄は平民の領有で後、後白河天皇の院領に獻ぜられ、更に文治二年高野山金剛峯寺根本大塔堂造料として御寄進となりしもので、高野山文書に據りて同庄の沿革を徴することが出来る。以來、尾道市は盛衰の歴史を繰返し、遂に今日の隆昌を見るに至つたのである。其の間降つて吉野朝時代より足利時代は内海戰略の重要地點となり、或は日鮮支貿易の主要港となりて彼我の史上を飾り、更に徳川時代、淺野氏の藩政當時に於ては藩府の經濟的寶庫として重用せられたのである。

本書は尾道市の市制實施以來四十周年を迎えし記念として世に贈られし意義あるもので、上卷に於ては前篇の概説篇にて、市の沿革を摘記し、後篇の各篇に於て、地誌・港灣・交通・宗教の四篇を詳記してある。中下の兩卷は未刊なるも、政治・經濟・學藝・社會・衛生・故家人物の各篇を收め、更に古文書其他の資料を附録として追加せらるゝ豫定なりと云ふ。猶ほ上卷の宗教篇中に收録の淨土寺文書は同寺の往時に於ける隆盛の狀を物語る史料で再讀に價する。

終に、中下兩卷の上梓を待望し、編者青木茂氏の筆勞に敬意を表するものである。

昭和十四年七月卅一日

武田 勝 藏

一宮市史

(一宮市役所
編並に發行)

愛知縣一宮市は、尾西平野の交通至便の地に位し、本邦屈指の機業都市である。當市は、こゝに鎮座の尾張一宮なる國幣中社眞清田神社を中心として發達した都市である。當市の歴史は眞清田神社の沿革と離るべからざるものである。同神社の創祀は悠遠の昔にして既に延喜式には各神大社として記載され、祭神は尾張の國造の祖神なる天火明命で、鏡造の遠祖眞清田大神として尊崇せられて居る。後、大化改新により國造政治の國司政治に改められし以來、大己貴神を祭神とせられたこともある。それは諸國に一宮が定められ、多く大己貴命を其の祭神としたことと、當地方に三輪氏が繁榮し、その祖神なる同命を以て祭神と改められし爲め

ならんと云はれてゐる。然し神威には何等變ることなく、朝野貴踐の尊信は極めて深厚である。

因に、尾張の國守として令名あつた大江匡衡の妻赤染衛門の如きは、本社に祈願を凝めて農民の争議の鎮定を請うたこともあり、農業の守護神として參詣する農民も群集したと云ふ。

當市は平安朝の昔より農耕の傍ら機業を營んで居つたもので、後、織物の産地として知られ、戰國時代には、一時關氏の居城の地となつたが、寛永以後は、尾州藩の直轄領として重用され、明治維新に及び、大正十年に市制を實施し今日の隆昌を見るに至つたのである。

本書は市民に温故知新の資料として贈り、又、學界に寄與する爲め編纂されたもので、上下二卷より成り、上卷に、總説・沿革・行政・司法警備・教育・兵事及び産業中織物の部迄を收め、下卷に産業中三八市場以下及び交通・社寺・名蹟・人物・文藝・風俗・雑載並に附録として史料・金石文・年表・索引を收め、猶ほ附圖五葉を添附し、各編の敘述は極めて周到にして、概ね各項末にはその引用書を掲記してある。

終に市民諸賢の本書を繕き當市の歴史を顧み先賢の遺業を彌ぎ、當市將來の發達に益協力し、大一宮市建設に邁進せられむことを切望すると共に、編纂者若山善三郎・森徳一郎の兩氏の勞作に對して敬意を表す。

昭和十四年八月五日

暴風雨の警報を聴きつゝ

武田 勝 藏